

目指す学校像	互いを認め、個性と良識を磨き合う学校づくり～学ぶ喜びと豊かな心、安心・安全と信頼・協働～
--------	--

重点目標	1 効果的なICT活用及びアクティブ・ラーニング等を推進し、生徒の学びに向かう意欲を高める。 2 教育活動の充実と教育環境の整備等により、生徒の学力及び体力の向上、エージェンシーを育む。 3 学校・家庭・地域の連携・協働により、「地域とともにある学校」づくりを推進する。 4 スクールダッシュボードの活用や指導力向上に向けた面談等により、教職員の働きがいを高める。
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価					学校運営協議会による評価				
年度目標					年度評価				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況【%達成率】	達成度	次年度への課題と改善策	実施日令和7年2月18日	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	(現状) ○R5年度全国学力・学習状況調査において、市・全国の平均正答率と比較し、国語、数学、英語の平均正答率ともに概ね良好な結果である。 ○市教委研究委嘱「小・中一貫教育」を推進し、学年単位や校種単位での教え合い、学び合いの授業実践により、思考の深化や表現力の工夫が見られる。 (課題) ○R5年度全国学力・学習状況調査「家庭学習」の質問項目において、肯定的な回答の割合は、全国・県平均を上回ったものの60%であった。また、市学習状況調査「授業における主体性」の質問項目において、肯定的な回答の割合は、市平均を新2年生は上回ったが新3年生は下回った。	生徒の学びに向かう意欲を高める取組の実施	①デジタル教材及びICT端末の効果的な活用及びアクティブ・ラーニングによる授業の実践 ②不登校生徒等の学習保障及び評価を実践する(SoIaを一むの効果的な活用) ③市教委研究委嘱「学びの連続性を活かした真の学力の育成」を推進する(学年・小、中単位での教え合い・学び合い実践) ④学力ポートフォリオによる具体的な手立て及び全国学調効果的な振り返りの実践 ⑤3年間の研究実践を生かした STEAMS TIME の実践 ⑥2者面談の実施及びいじめ撲滅強化の実践	○「TPC活用」生徒結果の90%以上(R5・1・2学年90%未満) ○学年単位での教え合い・学び合いの実践(年3回以上)できたか ○小・中の教え合い・学び合いによる中一の普通救命講習Ⅰの修了証取得(1学年) ○生活ノートと学習計画表の形式を合わせた計画表の活用(全学年)できたか ○「望ましい集団及び職員の相談体制」の生徒結果「十分である」「ほぼ十分である」のうち「十分である」の全学年65%以上(R5・全学年65%未満)	○TPC活用生徒結果の肯定的割合90%以上→R6・1年91.1%・2年95.1%・3年90.0%【1年101%・2年106%・3年100%達成】 ○学年単位での教え合い・学び合いの実践 ○小・中の教え合い・学び合いによる中一の普通救命講習Ⅰの修了証取得【100%達成】 ①体育の集団行動を3年と1年が合同実施 ②定期テストの取組方法を先輩が後輩にレクチャー・プレゼンする授業を展開 ③小学校の応急手当入門コースに中学生をアシスタントティーチャーとして派遣 ○計画表の活用できたか【100%達成】 ○「望ましい集団及び職員の相談体制」の生徒結果「十分である」の65%以上→6項目中2項目65%以上・6項目平均60.9%【93.7%達成】	A	①～⑥の方策について計画的に継続推進するとともに、来年度は、研究領域「学びの連続性を活かした真の学力の育成」の研究2年目となるので、1年目の成果・課題を踏まえて、新しい教科用図書となるため改訂された「さいたま市小・中一貫カリキュラム」を活用した学びの連続性を活かす教育課程の編成・工夫の研究実践を通して、生徒の主体性を育成する。 <参考>「アクティブ・ラーニング型授業」生徒結果の肯定的な割合全学年96%以上(+2%)	・応急手当入門コースに中学生を派遣していただき、小グループで充実した授業となった。 ・自分で計画を立てる力、自分に合った学び方を見出していく力を育むための一つの取組として計画表はよい。 ・小・中連携を深めて研修を進めたい。 ・ICTの活用、アクティブラーニングの推進はこれからの教育に欠かせないものであるため、今後も積極的に授業に取り入れてほしい。 ・小・中一貫教育の一つ、応急手当入門コースの授業への中学生派遣は大変意義があるので継続してほしい。 ・「わかりやすい授業と学び合い」は様々な場面で一人ひとりが活躍できる。学力向上と共に人間関係の構築も高められたい。 ・ICT活用の割合が、今の段階でも高いことはよい傾向ですが、より高くなるようお願いしたい。小学校との連携をより深めてほしい。 ・データ活用なども上手にできるよう効果的な学習の工夫をお願いしたい。 ・「家庭学習」「授業における主体性」の意識が高まることよい。	
2	(現状) ○全国学力・学習状況調査において「学校に行くのが楽しい」の質問に肯定的な回答をした生徒の割合は、全国・県平均を上回った。 ○コロナ禍により対面式給食を4年ぶりに実施した。 ○保健・美化委員会で校内の救急関係と清掃活動に関するHow to動画を作成し、生徒主体の活動を促進している。 (課題) ○市学習状況調査において「将来の夢や目標をもっていますか。」の質問に肯定的な回答をした生徒の割合は、全学年市平均を下回った。 ○大規模校につき、一斉下校時の歩道等の過密化及び、都市部につき車の交通量が多い。 ○昨夏、熱中症警戒アラートが多く発出された。 ○コロナ禍の影響で、小学校中学年時の運動不足等による怪我や体力の低下が懸念される。	エージェンシーを育む教育活動の実践 健康・安全教育と安全管理の推進	①3年間を見通したキャリア教育の実践 ②特別支援学級における体験学習の充実を実現する ③スクールダッシュボードと生活ノートの活用による教育相談等の実践 ④対面式とオンライン配信による儀式的行事の実施 ⑤生活目標を軸とした生徒会等による生徒主体の活動実践の推進	○学校評価の肯定割合「夢をもっているか」の「十分・ほぼ」の生徒結果90%以上(R5・84.9%) ②学校評価の肯定割合「一人ひとりが認められている」の「十分である」の生徒結果65%以上(R5・50%)	○「夢をもっているか」の肯定的な割合「十分・ほぼ」の生徒結果90%以上→R6 1年77.2%、2年72.3%、3年76.7% 学校平均75.4%【83.8%達成】 ○「一人ひとりが認められている」の「十分である」の生徒結果65%以上→R6 1年63.9%、2年54.7%、3年51.4% 学校平均56.7%【87.2%達成】	A	①～⑤の方策について計画的に継続推進させ、キャリア教育と体験型の学習、STEAMSTIMEの充実を一層図り、エージェンシーを育む共に、基本的な生活習慣「あいさつ」「時間」「清掃」についても活性化した生徒会活動を軸に重点的に指導していく。	・小学6年生は総合で「マイ・グッド・ライフ」としてどういう生き方をしたいの明らかにした上で、地域の大人にインタビューして、それを実現できる仕事を探っている。キャリア教育も小・中連携し、系統性をもったものにした。 ・基本的な生活習慣の中でも、特にあいさつの定着については、家庭での習慣もあり、困難さを感じている。これこそ小・中連携、家庭・地域との連携が不可欠であるとともに、いかに大人があきらめず継続して指導できるかが大きいと感じる。(大人同士もさわやかに挨拶するなど) ・狭い校庭を工夫して安全に使用していることを聞き、学校が生徒に寄り添っていると感じた。 ・学校紹介ビデオを生徒主体で制作したと聞き、生徒たちの能力の高さや学校に対する愛着を感じた。 ・キャリア教育、進路指導に工夫をして自己肯定感を高める必要性を感じる。 ・健康安全について生徒たちの関心が低いかもれない。関心を高めることができれば、学校評価の数値が上がるかもしれない。 ・学校は常に生徒の安全や健康について対策を考えてくれていると思う。 ・中学生の時期に夢(目標)を持つことは大切で、その夢に向かって行動してほしい。	
3	(現状) ○令和4年度より学校運営協議会を設置し、「これからの社会を主体的に生きる生徒の育成」を掲げて「内谷中ボランティア制度」を実施している。 ○PTAと連携・協働してコロナ禍を踏まえ時流に応じた教育活動の充実及び情報発信の在り方について、検証・改善に取り組んでいる。 (課題) ○学校運営協議会での熟議等により、地域が目指す「育成したい子ども像」を共有し、その実現に向けた取組「内谷中ボランティア制度」の生徒会主導実施を持続可能にしていこう。	家庭・地域との連携強化のための取組の実施 学校運営協議会を基盤とした学校・家庭・地域の連携・協働体制による取組の推進	①気候変動や時流、コロナ禍の成果を踏まえた行事の実施 ②様々なツールを活用した家庭・地域との連携強化の実現 ③PTAとの協働による教育活動の実践	○学校評価の肯定的な割合「期待や願いへの満足感」の保護者結果の回答「十分である」「ほぼ十分である」90%以上(R5・84.7%) ○学校評価の肯定割合「生徒会の自主的な活動」の「十分である」が生徒結果70%以上(R5・56.9%)	○「期待や願いへの満足感」の肯定的な割合「十分」「ほぼ十分」の保護者結果90%以上→R6 86%【95.5%達成】 ○「生徒会の自主的な活動」の肯定的な割合「十分」の生徒結果70%以上→R6 1年60.2%、2年63.6%、3年56.3% 学校平均60%【85.7%達成】	A	①～③の方策を継続実施する。また、コロナ禍の成果であるデジタルと対面式の集会和行事の実施により、大規模校のデメリットの改善しメリットを生かし教育効果を高める。さらに、生徒会のよりよい学校づくりとPTAとの協働による教育活動の実践を一層推進する。(R6体育館空調設置)	・ボランティア活動の充実が図られていた。卒業生がボランティアに来ることで交流が生まれ、中学に行ったら同じことをしたい気持ちが育まれた。 ・「よりよい学校にするため特に何に尽力したいか」の項目で挨拶や身だしなみの指導について教職員と保護者で優先順位の意識の差がみられた。学校と保護者が共通認識をもってこの差がうまるとよいと思う。 ・ボランティア制度は、地域行事の裏方を体験し、地域の思いを感じる活動の場として学びが多い。 ・生徒がボランティア活動に積極的に参加してくれて、育成会や社会福祉協議会の行事に親しみをもってくれる機会につながった。今後多くの生徒が活躍できる場を工夫したい。自主的に参加してくれる生徒の姿を見られたことが喜ばしい。 ・生徒とのランチミーティングは非常に有意義で、地域・保護者が関われる良い機会として今後も継続してほしい。	
4	(現状) ○タブレット端末をはじめとしたICTの活用について、エヴァンジェリストが中心となり研修を重ねて、教員間の取組の差が縮小されている。また、校務への活用内容も増加している。 (課題) ○スタディサプリ・デジタル連絡及び採点等新たなコンテンツの導入及び効果的な実用ができるか。 ○授業改善を図るために、スクールダッシュボード授業アンケートを活用できるか。 ○同僚性や協働性の発揮や働き方改革に対する意識に教員間で差が見られる。	ICTの効果的活用等による指導の向上や校務の効率的な実施と同僚性や協働性の発揮による業務負担軽減の実践	①ICT及び未来を拓く学校づくりに関する校内研修並びに受講奨励面談の実施 ②ICTを効果的に活用による教育活動とデジタル教材等の効果的な活用の実施 ③特別の教科「道徳」の学年内教員のローテーションによる授業実践 ④デジタル連絡及び採点等新たなコンテンツの導入及び実用 ⑤教員各自の専門性を活かした授業時間表の実現とスクールダッシュボードを活用した授業改善 ⑥衛生委員会の実施及びノー残業に関する取組の実践	○デジタル連絡及び採点ツールの実用化(2学期より) ○スタディサプリを定期テスト前や長期休業中に必ず活用できたか ○機関・希望研修や文科省・Nitsの動画研修の教員受講率100% (R5・76%) ○ストレスチェックによる「総合した健康リスク」の低下(R5・82%、R4・83.5%) ○ノー残業ディ・ウィークの実施(通年)	○2学期よりスクリーン及びリアレンジメントの運用開始【100%達成】 ○全学年、定期テスト前や長期休業中の課題を配信した。(5教科中第1学年社会のみ長期休業中の配信なし)【93%達成】 ○機関・希望研修や文科省・Nitsの動画研修の教員受講率100%【100%達成】 ○ストレスチェックによる「総合した健康リスク」R6・78.5%(対象51人)【100%達成】 ○年間7回実施【100%達成】	A	①～③の方策を継続実施する。⑤の本格運用となったスクールダッシュボードの効果的な活用については、生徒理解・教育相談について学校として効果的に運用できたが、生徒の学習・生活支援、教職員の授業改善については、活かされていないので学期に1回全教科授業アンケートを実施する期間を設定するなどしたい。⑦は、意識向上のため継続するとともに「出張後は原則直帰など」の具体例を提示して実施する。	・同僚性や協働性を発揮し、働きやすい職場に尽力されており、成果が上がっていることが素晴らしい。 ・スクールダッシュボードの活用については各校悩みながら進めているところだと思いが、次年度への改善策に出ていることをぜひ実施してみても、成果を検証してほしい。 ・教員の働きがいを高めることや健康、労働環境に配慮しつつ、より良い授業の展開と生徒の質向上につなげてほしい。教師を目指す人も増えるので働き方改革を引き続きお願いしたい。 ・「学力向上」が中学校生活に臨むことで高い数値であることから、デジタル教材の活用やICTの効果的な活用が分かる指標があるとよい。上位層の学力がより伸びる環境も必要と思う。	